新名誉会員

吉崎鴻造君

(東洋鋼鈑(株)取締役社長　工博)

君は昭和 13 年3月九州帝国大学工学部冶金学科卒業後，日本特殊鋼(株)および海軍技術士官を経て昭和 21 年4月東洋鋼鈑(株)に入社，本社技術部長，下松工場次長，本社企画部長，中央研究所長（兼務），取締役，常務取締役，専務取締役，副社長を経て昭和 54 年6月取締役社長に就任現在に至っている．この間昭和 40 年6月から昭和 54 年6月にわたり東洋製罐・東洋鋼鈑綜合研究所所長をも兼務した．

君は東洋鋼鈑入社後いちはやくぶりきの品質向上に挺身して成果をあげ，次いでぶりき原板の冷間圧延による生産，電気めっきの導入等ぶりき製造技術の向上と優良ぶりきの量産に努め，爾来現有の5タンデム冷間圧延機2基，連続酸洗ライン2基，調質圧延機3基，ダブル・レデュース圧延機1基，連続焼鈍ライン2基，電気めっきぶりきライン3基，ティンフリースチールライン3基を基幹とする世界屈指の罐容器材料製造工場を完成させた．

また，研究面においては，プラスチゾル塗装法による塩化ビニル鋼板を開発して新用途を開拓し，次いで電解クロム酸処理鋼板を新製品として世に出したが，これはティンフリースチールのさきがけである．このほかティンフリースティールの表面特性の向上安定，接着方法等に見るべき成果をあげ，また，ハイドロテンションレベラーを開発し薄鋼板の形状修正技術に貢献した．これら各種の新技術はいずれもイギリス，西ドイツ，カナダ等に技術輸出されており，君はこれらの技術業績により，昭和 39 年大河内記念技術賞，昭和 45 年本会より香村賞，昭和 47 年藍綬褒章を受賞した．

この間，君は本会業務の発展に著しい貢献をした．昭和 28 年2月本会金谷三松主事の急逝に対し，理事会は当時編集委員であった君に主事代理を委嘱することを決定し同年6月橋本芳雄君が事務局長として着任するまでの間本会事務の実際上の責任者を勤め，以後約2年間常務委員として運営助言を行った．昭和 33 年以降，本会理事に選ばれること4回，他に監事1回に及び，そのうち昭和 42 年から2年間は企画委員長，昭和 46 年から2年間は副会長を兼ね，本会の転換期ともいえる時期にあって事業の拡大，財政基盤の強化，国際化の推進などに尽力した．

また，昭和 45 年に開催の鉄鋼科学技術国際会議については，組織委員会副委員長および財務委員長として計画の当初から事後処理まで数年間にわたり，本会が責任をもって実施した初めての一大国際行事の特に財務面における運営に当った．昭和 47 年よりは特別資金運営委員会常任委員として本会特別資金の円滑な運営に努力し現在に至っている．

新 名 誉 会 員

不 破　　祐 君

(東北大学名誉教授，新日本製鉄(株)顧問，工博)

君は昭和 16 年 12 月東北帝国大学工学部金属工学科を卒業，大学院特別研究生を経た後，昭和 20 年東北帝国大学講師，翌 21 年助教授に任ぜられた．昭和 29 年8月より3年間米国マサチューセッツ工科大学へ出張し Doctor of Science を取得し，昭和 37 年2月工学博士，同年4月東北大学教授となり，昭和 46 年4月からは選鉱製錬研究所併任，昭和 50 年3月から2年間は東北大学評議員となり，昭和 54 年3月退職，東北大学名誉教授となり，現在，新日本製鉄(株)顧問となっている．

この間，君は溶融鉄合金中主要成分の活量測定に関する研究，溶融鉄合金への水素と窒素の溶解度測定，高温熱量計による鉄合金の混合熱測定に関する研究，溶融スラグの化学的性質に関する研究，珪酸塩スラグの構造に関する研究，脱酸に関する研究，製鋼反応の速度論的研究，製銑反応に関する研究等の鉄鋼製錬の物理化学的研究及び鉄鋼のガス分析法の研究に従事して多大の功績をあげるとともに，教育と指導により人材の養成に尽力した．以上の数々の優れた研究業績に対して，本会より昭和 37 年に渡辺義介記念賞，昭和 50 年に俵論文賞，協会事業功労賞，昭和 51 年に西山賞を，日本金属学会より昭和 36 年功績賞，昭和 46 年　谷川ハリス賞を受け，昭和 51 年には本多記念講演を行った．

君はマサチューセッツ工科大学時代の恩師，友人を初めとし世界中に非常に多くの親友を持ち，優れた学識と語学力を活用して学術の国際交流に活躍し，鉄鋼製錬学における日本の国際的地位を高めた．昭和 44 年6月から 10 月までオーストラリアのニューサウスウェールズ大学に客員教授として招かれ，昭和 48 年には米国 The Metallurgical Society of AIME の Fellow，昭和 54 年には米国 National Academy of Engineering の外国会員に推挙され，翌 55 年には American Society for Metals の Fellow となった．又昭和 56 年には米国で Howe 記念講演 (ISS AIME) を行い，同年2月より5月まで米国ミシガン大学，9月にはポーランドの鉱山冶金大学の客員教授として講義をした．

君は本会をはじめとして学会の活動に大きい寄与をした．本会役員としては昭和 41 年以降理事に選ばれること4回8年に及び，そのうち昭和 48 年から2年間は副会長，昭和 52 年から2年間は研究委員長を勤めた．又昭和 49 年には第1回日本ドイツセミナーの本会代表，昭和 50 年には欧米研究教育視察団団長，昭和 54 年，56 年には第7回，第8回日本ソ連製鋼物理化学シンポジウム本会代表及び第2回，第3回日本チェコスロバキアシンポジウム本会代表，昭和 55 年には第1回日本オーストラリア精錬冶金シンポジウム本会代表を勤めた．又昭和 54 年度は日本金属学会会長に任ぜられた．